

もくじ 鶏の絵馬と絵馬の奉納 1P 千住掃部宿の「旧書留」から③ 2P
伝統と保存の技術Ⅰ 渡邊宗雲 4P



鶏の絵馬 『吉田政造筆 東京の絵馬』(当館蔵)
親子で描かれているものは、夜泣き止めから「子の成長」を祈るとされることもある。

絵馬の奉納と鶏の絵馬

荻原 ちとせ

■絵馬の季節

一月から二月にかけては、新年そして稲荷神の祭りのある初午・二の午があり、一年で最も絵馬の奉納が多い季節ではない

■鶏の絵馬の意味

鶏は干支である他、火の神、竈の神である三宝荒神(荒神)に関連のある生き物と考えられている。
『千住の吉田政造筆 東京の絵馬』(昭和三七年)は、千住の絵馬屋(千住四一五八)吉田氏の肉筆で絵馬の木枠ではなく、和紙に描いたものをそれを綴って本にまとめた限定三十五部の和本である。江戸風俗を



絵馬売り

「初午に極彩色の武者、狐に宝珠の玉、馬等を描いたもの担いで売る。」とある。絵馬屋自体は、市中至る所に当時堂々たる店舗を持って営業していたとあり、常設の店舗とは別に、初午には特別の絵馬売りの行商が出たことがわかる。

『江戸東京風俗野史』伊藤晴雨 当館蔵

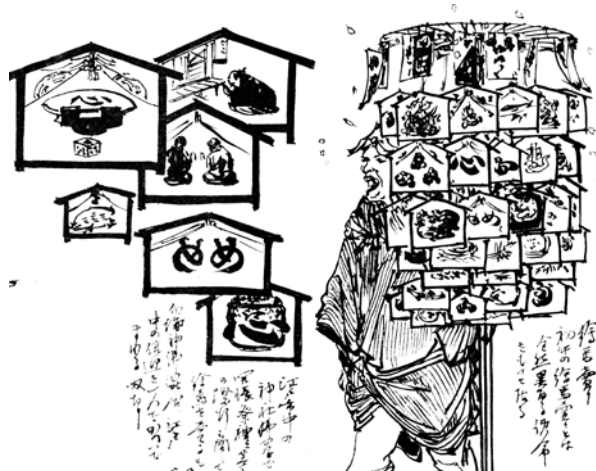
研究した宮尾しげを氏の企画によるもので、宮尾氏作の木版で刷られた解説がつけられている。それによると、鶏は、「十、十一月両晦日の荒神祭に用いられる、神無月に荒神が出雲への行き帰りの乗りものとして用いるからである。家によっては馬の絵を使うところもある。台所は火を使うので敏やかな庭鳥の赤いトサカの赤から火を連想して火の用心といういみにも考えられあげられる」とある。
『守貞謄稿 卷六』(天保八(一八三七)年、嘉永六(一八五三)ころ)によると、三都(江戸・京都・大坂)とも、毎月晦日には荒神松売りといって、荒神に供える松を売る行商が来るが、江戸の特徴として次のように記している。「江戸は戸の大小を扱わず各尺余の小枝一枝を供す、又榊を副す。松枝価四文。又江戸にては鶏を画る絵馬を兼売る。是亦荒神に供するの料也。鶏の絵馬を荒神に供する。油虫を除くの呪と江俗云伝へ行之」とあり、荒神に鶏の絵馬を供えるのは、江戸・東京の習俗であったことがわかる。また、その効力としては油虫(ゴキブリ)除けとされている。
残念ながら、周縁地域の足立・江戸川・葛飾区などでは荒神祭と鶏の絵馬については聞き取ることができず、基本的には江戸・東京の都市部で盛んであった儀礼であろうと思われる。しかし、荒神を祀る家も少な

足立史談

第588号

2017年2月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
(28-308)



絵馬売り

左上は、盃に心とサイコロに錠前で、博打と酒断ちを祈るもの。

くなり、絵馬を入手する手立てもな
くなり忘れられつつある。

また、一般には鶏は夜に鳴かない
ことから、子どもの夜泣きを収める
祈願のために奉納するものとされ
る。このように祈願を画で表す絵馬
についても、「向かい目」の絵馬を
奉納し、眼病治療を祈る薬師如来の
ように、特別な祈願を受ける社寺以
外では伝承されにくく、鶏の絵馬の
意味は薄れ、干支絵馬としてのみ認
識されるようになっていくことが想
像できる。

■江戸の絵馬売り 伊藤晴雨の『江
戸東京風俗野史』によると初午の絵
馬売りとは異なり、江戸市中の神社
仏閣の開帳祭礼の際に、行商に出る
者がいたことがわかる。「神仏混交、
江戸中の信仰を一人でかついでまわ

る奴なり」(写真参照)とあるよう
に、特定のものに限らず、行き先に
合わせてさまざまな絵馬を用意して
いる。こうした行商は、絵馬をつく
る職人や店舗とは違い奉納の現場で
人々の需要に応える便利な存在で
あった。このような、絵馬の充分な
供給や販売方法が、図柄の意味や奉
納先などを自然に人々に認識させる
ことになっていったのだらうと思う。

■現代の小絵馬 手描きの絵馬をつ
くる職人がいなくなり、年中行事や
祭礼の際の絵馬奉納の習俗も消えつ
つあるなかで社寺での小絵馬の奉納
は盛んである。社寺の授与所で小絵
馬を求め、その場で祈願や日付など
を書き入れる。そのような社寺では
小絵馬の奉納場所も作られている。

小絵馬の形も、いわゆる絵馬型で
はなく円やハート型、絵柄も
ゲームキャラクターなど現代
的なものもある。近年は、個
人情報保護の視点から記入
面に貼って隠すことのできる
シールを準備しているところ
もあるようである。

絵馬を神仏に奉納して祈る
という根本的な習俗は変わら
ないが、生活の変化に合わせて
て願いの内容も絵馬の奉納の
方法も変化している。小絵馬
のあり方を見ると、ささやか
な信仰に関わる文化をうかが
うことができる。

(郷土博物館学芸員)

千住掃部宿の「旧書留」から③

土地台帳と町の発展

多田 文夫

千住掃部宿の町役人だった石出家
文書の「旧書留」は、さまざまな記
述があるが、町役人の備忘録として
の性格を強く見せてくるのが、検地
や町役人の変遷についての記述部分
である。千住掃部宿は掃部新田とい
う農村から、宿場の一部へと変化し
つつ経済的に発展し、新たに千住橋
戸町や千住河原町が成立していくた
め、比較複雑な変遷を見せる。

■釈文

①検地年代

(3丁表つづき)

本田元禄八亥年 大関大助様

同十五十二月御水帳渡、

新田享保十八丑年 寛播磨守様

屋鋪彦畝十八歩、橋戸勘七分

同、明和七寅年 伊奈半左衛門様

下々田式町壹反九歩 伊豆殿野

同、寛政七卯年 久世丹後守様

屋敷八畝十五歩、橋戸分林萱野

屋敷二成、

(3丁裏)

同、寛政

橋戸発り

寛永十七辰より

延宝八申五月迄

四拾壹年掃部宿
名主持

延宝八申六月より

貞享二丑迄

六年橋戸長左衛
門江下役申付候

貞享三寅より

享保二酉十二月迄

三拾貳年掃部宿
名主持

享保二酉十二月廿七日より川原伝右

衛門江下役申付候、

(4丁表)

③河原町記事

川原発り

承応三年より

延宝八申五月迄

廿八年掃部宿
名主持

延宝八申六月より

門江

貞享二丑迄

下役申付候、

貞享三寅より

享保二酉十二月迄

三拾貳年掃部宿
名主持、

享保二酉十二月廿七日より川原伝

左衛門江下役申付候、

宝永二酉年より当町之もの川原江霞

實張二而前裁宿致候、右株分遣候儀

無之

(4丁裏)

②橋戸町記事

阮、宝暦五亥迄前裁宿有之、追々川原江引越、其砌八川原二者家拾六軒有之候、

【④荒川見廻役】

延宝五巳より天和元西迄年寄次郎左衛門、荒川見廻役相勤役相勤候、

【⑤問屋代役】

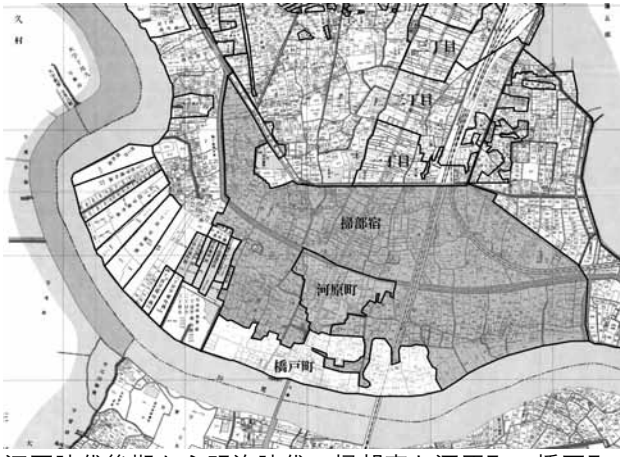
千住町組御検地願候二付、名主弥五右衛門、問屋年番二付、八ヶ町江相談之上、元禄六酉年、当町久右衛門江問屋代役相願同人役、宝永五子年まで拾六年相勤候、

(5丁表)

【⑥掃部宿新家】

掃部宿新家、享保十八丑年、坂尾源左衛門様江願、家建、

年寄善兵衛、同次郎左衛門ハ



江戸時代後期から明治時代の掃部宿と河原町、橋戸町

往古より住居二候、

■解題6 検地・町役人記事

【①検地年代】 検地は年貢賦課の基礎だが、千住を含めた足立や周辺の大部分の地域では元禄八(一六九五)年に施行された武蔵国幕領総検地で作成された検地帳(元禄一〇年に交付)が明治まで用いられた。検地年代も元禄八年から記述され、それ以前の元和、寛永など江戸初期の検地等は触れられていない。年代と検地奉行を次に掲げる。

千住掃部宿の全体検地

元禄八(一六九五)年 大関増恒

新田検地Ⅱ追加開発地の検地

享保十八(一七三三)年 寛正鋪

明和七(一七七〇)年 伊奈忠敬

寛政七(一七九五)年 久世広民

元禄検地の奉行は黒羽藩主大関増恒(おおぜき・ますつね)、享保検地は

勘定奉行の寛正鋪(かけい・まさはる)、明和検地は代官・伊奈忠敬(い

な・ただひろ)、寛政検地は勘定奉行の久世広民(くぜ・ひろたみ)と

記している。なお久世は丹後守であり「丹波守」としているのは誤記であ

ろう。

千住掃部宿の町役人変遷もその特徴ある記述になっている。幕府の

公的な郷村帳簿の上では、江戸時代を通じて千住河原町と千住橋戸町

は、枝郷であって千住掃部宿のうちに位置づけられている。しかし本資料が成立する江戸後期には、実態として河原町も橋戸町も、それぞれの町として発展し、経済的にも繁栄している。

元も一つの町だったところが、分離成立していくため、その成立経過は複雑である。その経緯を把握するため記述が行われている。

【②橋戸町記事】 千住橋戸町の役人は掃部宿の名主がたびたび兼帯しつつ、長左衛門(前号参照)や伝右衛門らの役人が勤めている。

【③河原町記事】 千住河原町も橋戸町と同様で、しばしば掃部宿の役人が兼帯しつつ、橋戸町の長左衛門や伝右衛門が管理していたことが記されている。宝永二(一七〇五)年頃からヨシズ張りの「前裁宿」(読み「せんざいじゆく?」)が成り立ち、宝暦五(一七五五)年以降、家々が立ち並んでいたとしている。

千住の青物市場(前裁市場)は、成立に関しての文献が少なく、享保二十(一七三五)年の御用市場請書がこれまで最も古く、「掃部宿市場」として米穀、川魚、前裁の御用を務めることが記されている。これに本資料によって宝永、宝暦など成立期の資料が加わった。

次に諸役の記事がある。いずれも

記述事項としての重要度がいまひとつ判然としないが、それぞれ掃部宿の役人として重視していたと考えられる。

【④荒川見廻役】 荒川の見廻役という役割についても、これまで余り知られない。江戸時代前半の延宝五(一六七七)年から天和元(一六八一)年に設置されていたことが記述されているのみのため、詳細は不明である。

【⑤問屋代役】 千住宿の宿駅機能(馬継・宿泊・書状送達)全体の取りまとめ役である問屋役に関する事項で、元禄六(一六九三)年・宝永五(一七〇八)年の間に、代役を務めたことが記されている。

【⑥掃部宿新家】 新家(しんや)と称する地名が千住では五丁目などで知られているが、地字名ではないらしく、明確なポイントが不明である。掃部宿新家も、他の「新家」と同じように、新たに町並となった地域を指す名称と推定するのが妥当だろう。幕臣の坂尾幸宣に願い出ているが、のち幕府巡見使をつとめる坂尾の当時の役職は未詳である。

以上の様に今回分は千住掃部宿と河原町、橋戸町は江戸後期から昭和戦前まで商業的な中心だが、その成立過程をうかがえる記述部分である。

(郷土博物館学芸員)

伝統と保存の技術

仙像彫刻
渡邊宗雲

日本の工芸技術を啓発・普及する鷹峯フォーラム参加事業として、当館では、仏像彫刻・渡邊宗雲氏、表具師・勝村真光氏にお話しいただきました。写真を投影しながら、その技術や工程について詳しくご説明いただきました。ごく簡単ですが、内容を紹介します。

伝統工芸師、渡邊宗雲氏は、父である木彫師渡邊崇雲氏のあとを継ぎ、大学の彫刻科に進むとともに、葛飾区宝町にあった平櫛田中（ひらぐしでんちゅう）木彫研究所に通い修行をはじめた。学生時代から卒業後も彫刻の先生方に師事し、最後に



浅草の仏師であつた西村房藏先生に師事し、さまざまな仏像を完成させた後独立した。

■大きざの割り出も

合は、「根則」という仏像の体の各部分の比率が決まっており、中国、高麗、また日本でも平安期、鎌倉期、江戸期など時代によってもその比率は異なる。この根則（こんそく）を用いて、制作する仏像の実際の大きさを割り出していく。その後、粘土



原型と使用する木材

により立体的な原型を作る。この段階で完成させる仏像の仕上がりは明確になる。

■木取り
仏像には檜・楠・桜・白

檀などが使われ、木目を考えながら、どの位置にどの部材を使用するか木取りを行う。いわゆる寄木造りとなる。腕や手の内側などは、取り外さなくては彫刻できないため、寄木の効果が発揮できる。

■彫りと内割り 大きく彫る「粗彫」の作業から細かい彫りに入る「小作りの作業に進む。原型に星取り機（コンパス）をあて、彫りの深さを測り、そのまま木材にあてることです。写し取り彫刻していく。

「仕上げ彫り」の前に木の内部を削る「内割り（うちぐり）」を施す。木材の表面と中心部分の乾燥の違いによって木に割れが入ることを防ぎ、また仏像を軽くする効果もある。内割りのあと、腕や膝などの寄木をしつかり接着させ、仕上げの彫りを行う。

■目の仕上げ 仏像の目には、彫つて作る彫眼と、目をはめ込む玉眼がある。玉眼を入れる場合には、仏像

の頭から顎にめがけて鉋を入れて割り、顔の内側を彫って、ガラスの目を内側からはめたあとに接着させる。割った木はびったりと合わせる。ことができ、その後、彩色などを施すと全く割れ目はわからなくなる。

■彩色 彫刻の終了した仏像は木をそのまま生かした素地作りのほか、膠（にかわ）でといた顔料ですべてに加色した極彩色、また、金箔を押したものに仕上げられる。

渡邊宗氏の言葉 仏像彫刻で大切なことは、伝統的な作り方を熟知し、きまりごとに従うことである。拝む人の心を写すものである。思わず合掌したくなる仏像を制作するよう心がけている。



木材を組んで粗彫りを始める



粗彫り



本体の内割りの様子
ひざの部分も別に内割りしてある。



大天狗の玉眼